

「暑中お見舞い申し上げます」に♪が付くと、キャンディーズを思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。昭和世代にしか通じないと思っていましたが、最近の昭和ブームなのかキャンディーズが偉大だったのか、病棟の平成生まれのスタッフにも通用しています。中には「推しは細川たかしです」という20代のスタッフもあり、意外にも世代間のギャップはそれほど大きくないのかもしれないと感じました。

さて、今年は昨年よりも22日遅い梅雨明けとなりました。気象庁は今年の4月から、これまでの「夏日」、「真夏日」、「猛暑日」に、新たに「酷暑日」（最高気温40℃以上）を予報用語として追加しました。今年の夏は猛暑となるのか、あるいは酷暑日が観測されるのか、気になるところです。そこで注目されるのが「エルニーニョ現象」です。一般的にエルニーニョ現象が発生すると日本では冷夏になりやすいとされています。しかし、今年は、エルニーニョ現象が発生しても、いくつかの要因により、むしろ暑い夏になると予想されています。

昭和の夏といえば、簾に風鈴、夕方の打ち水、そして海水浴や海の家が夏の風物詩でした。しかし近年、全国の海水浴場は1990年の1,379カ所から970カ所まで減少し、海水浴客数も2007年のおよそ2,000万人から500万人を下回るまでに減っています。レジャーの多様化や少子化を背景に、若者の「海離れ」も進んでいるようです。本県でも、少し前までは自然のビーチが数多くあり、医局の夜通しビーチパーティーを楽しむ場所に困ることはほとんどあり

ませんでした。しかし、最近ではその場所も次第に少なくなっています。琉球大学と米国ミネソタ大学などの共同研究では、沖縄の自然海岸は100年前に比べると100km以上消失したと報告されており、最近では、本島北部を中心とした砂浜の減少も問題となっています。沖縄の夏の風物詩であったビーチパーティーも時代とともにその姿を変えつつあるようです。

一方、地球温暖化や開発による環境の変化だけでなく、ワークライフバランスやパラレルキャリアにデュアルライフ、タイムパフォーマンス（タイパ）など、価値観やライフスタイルも昭和の時代から大きく変わりました。

しかし、本誌には昭和から変わらず受け継がれているものがあります。昭和52年から始まった8月号恒例の「緑陰随筆」です。今年で49年目を迎えました。今回も多くの方からご寄稿をいただきました。本誌の夏の風物詩として、これからも末永く受け継がれていくことを願っています。

少々話が横道にそれましたが、今月号も報告、生涯教育、インタビューなど、充実した内容となっています。ぜひご一読ください。また、「医師会に入るメリットは何ですか」という声を耳にすることがありますが、その答えの一つが、本誌の「お知らせ」のページです。会員の皆様に役立つ情報を数多く掲載していますので、こちらにもぜひ目を通していただければ幸いです。

広報委員 出口 宝

